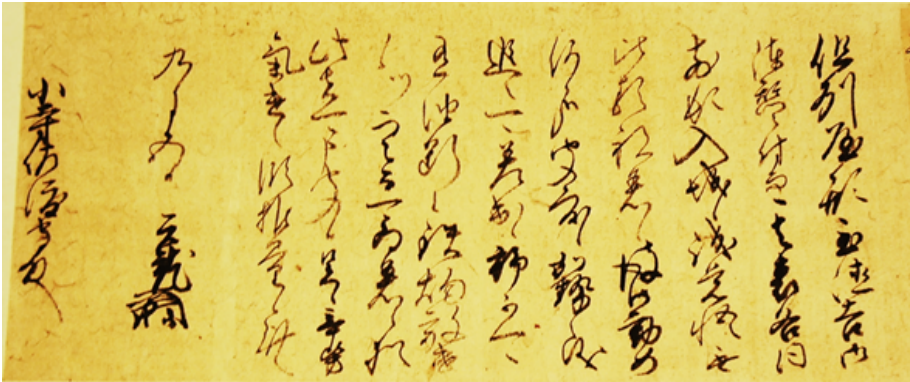


中世

解説

因幡における鉄砲の登場



永禄7年(1564)毛利元就書状(『小寺家文書』) ★

■山陰における鉄砲の使用は長篠合戦より早かった！

戦国時代にポルトガル人によって伝えられた鉄砲(火縄銃)は、日本の合戦のあり方や築城に大きな影響を与えた。

鉄砲が武器の主流として合戦の場で使用されるようになったのは、1575(天正3)年に織田信長が武田勝頼を破った長篠合戦からとされている。しかし、1563(永禄6)年の毛利と尼子の戦いにおける毛利軍の負傷兵をみると、約6割が鉄砲による傷であると記されている。長篠合戦の10年以上前に、山陰の合戦では鉄砲が使用されていたことがわかる。

■鳥取県に鉄砲が伝わったのはいつ？

鳥取県に鉄砲が最初に伝わったのはいつ頃だろうか。この資料は1564(永禄7)年に因幡で毛利と山名が戦った際に、毛利元就が因幡国の宮吉城(鳥取市気高町)にいた小寺元武に宛てた書状である。

これによれば、元就が小寺のもとに加勢として「鉄砲放」と呼ばれる者たちを派遣したと記されている。「鉄砲放」とは鉄砲を扱うことのできる優れた射撃技術を持った者たちのことである。鉄砲が全国的に普及する前は、鉄砲を専門に扱う射撃隊が組織されていた。

これ以前に因幡・伯耆で鉄砲に関する記述は見あたらないことから、鳥取県内で鉄砲が初めて登場するのは、この書状が出された1564年の可能性が高く、それは毛利元就によって宮吉城に持ち込まれたと考えられる。その後、因幡の合戦でも鉄砲が武器の主流になっていく。

(担当：岡村吉彦)

【意識】
山名祐豊が徳吉に進軍してきたので、そちらの軍勢についても、すぐに(宮吉城へ)入城したとのこと、その覚悟は誠に祝着である。その方面の戦況について聞きたい。加勢については追々派遣する。

鉄砲放の者たちも遣わした。まもなく到着するだろう。あとはこの使者が詳しく説明するだろう。(以下略)

【読み下し文】
但州屋形^①、徳吉^②に至り、御陣替えにつき、その表各々同前に入城候、誠に覚悟比類なく祝着候、彼御動き如何候や、聞きたく候、加勢の儀、追々差し出すべく候、聊かも油断あるべからず候、鉄砲放遣わし候つ、定めて着たるべく候、猶この者申し聞かすべく候、呉々も辛勞気遣いの段、推し量り候、謹言(永禄七年) (毛利)

九月五日 元就(花押)
小寺佐渡守(元武)殿

①但州屋形：但馬守護の山名祐豊のこと。毛利に敵対し、因幡の鳥取城を攻撃していた。
②徳吉：鳥取市徳吉

参考資料

- 鳥取県『新鳥取県史資料編 古代中世1 古文書編 下』768頁(2015年)
- 秋山伸隆「戦国大名毛利氏と鉄砲」(『戦国大名毛利氏の研究』)
- 岡村吉彦「因幡における鉄砲の登場」(『鳥取地域史研究』8号)
- 岡村吉彦『鳥取県史ブックレット4 尼子氏と戦国時代の鳥取』(2010年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。